

痴漢されそうになっている

S級美少女を助けたら  
隣の席の幼馴染だった

ケンノジ

Illustration フライ



特別書き下ろし短編 第4話



## 4 ピクニックの準備 会議編

今度の休みに、近所の緑地公園にピクニックに行くことになった。

俺と伏見<sup>ふしみ</sup>、鳥越<sup>とりごえ</sup>、茉菜<sup>まな</sup>の四人で。

今日は、俺の部屋で作戦会議中だった。

「どうしよう。すごい楽しみかも……」  
伏見が胸をときめかせていた。

「私、そんなふう遊ぶの、はじめてかも」  
鳥越がぼそりとひと言つぶやく。

最初は、伏見と二人で行く予定だったけど、鳥越も誘おうとなったのだ。

俺と伏見二人と遊ぶのは嫌なのかもしれないと思ったけど、そんな様子もなく何よりだ。

「お弁当は、あたしが作るから任せて」  
ぐつと茉菜が親指を立てた。安定感抜群の茉菜ママだった。

「飯系は、茉菜がやるとして……あとは何がいるっけ」  
かくいう俺も、この手の遊びははじめてなので、何が必要なかさっぱりだ。

「はいはい、と伏見が挙手をした。  
「飲み物！」

それもそうだ。俺は携帯のメモ帳に「飲み物」と入力する。

「あとは、フリスビー」

「……犬でも連れていく気か？」

「にーに、知らないのー？ 投げたらにーにが走って取りに行くんだよ？」

「新手的イジメだろそれ」

くすつと鳥越が笑う。

「いいねそれ」

よくねえよ。

ギャルの茉菜と物静かな鳥越は、ウマが合わないんじゃないかと思ったけど、今のところそういう素振りはない

い。

「諒くん専用フリスビーを買わないと」

「俺専用の意味ないだろ。□でキャッチするわけでもなし」

一応フリスビーとメモしておく。

「フリスビーはさておき。他は？」

「お弁当、わたしも作っていいのかな」

「伏見は……やめとこう。それは茉菜がいるから大丈夫。任せとけば間違いないから」

「にーには、あたしのご飯で育ってるからねー。その評価は当然」

るんるんな茉菜とは対照的に、不満げに伏見は唇を尖

らせた。

「えー？ わたしだって料理でできるのにい」

また弁当をカボチャ畑にして持っていく気か？

「はい、他」

「フリスビーがありなら、バドミントン、要るでしょ」

「茉菜ちゃん、それイイネ！」

「でっしょー？」

伏見と茉菜で盛り上がっているけど、俺と鳥越は、ノ  
ーリアクション。

バドミントンって、上手くできた覚えがない。まだフ  
リスビーのほうが上手くできそうだ。

「にーに、メモって。バドミントンって」

へいへい、と俺は携帯にメモをする。

運動神経がいい伏見と茉菜に対して、俺は平均かやや下。

「バドミントン……」

そうつぶやく鳥越も、どうやら俺と似たような運動神経のようだ。

「鳥ちゃん、下手っぴでも大丈夫だよ。にーにのほうがいい下手だから」

「そうなんだ？」

と鳥越に尋ねられたものの、実際どうなんだろう。

鳥越のバドミントン能力がいかほどか、俺は知らないし。

「それは、実際やってみないとわからないだろ」

「遊びだから、上手い下手は気にしなくてもいいよ」  
にこつと伏見が女神スマイルをする。

「運動神経いい人は、悪い人の気持ちかわからないから、気にしないでいって簡単に言えるよね」

鳥越がぼそつと言った。思ってたことは同じだったけど、ここは流しておこう。

「話がまとまったところで、買い出しに行こう！」  
伏見の号令で、俺たちは腰を上げる。

「ホームセンターかな？」

「ホームセンターだろうね」

「ご飯系の食材はスーパー行かなきゃ」



伏見、鳥越、茉菜がお互いに確認しながら部屋を出て  
いった。

どうなることやら。

おい、伏見。財布忘れてんぞ。